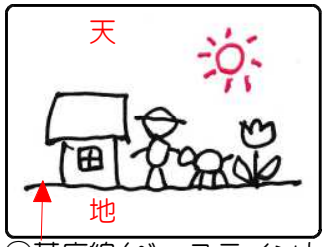
図画工作教育講座３　《　発達段階　》

①頭足人間	②擬人化	③レントゲン描法	④拡大描法	⑤展開描法	⑥多視点描法
世界共通の幼児期特有表現	顔を描き込むことで感情移入する	透明化して内外を同時に表現	重要なものを強調する表現	重なりを平面化して表現する	顔は前向きで鼻は横向き

低学年では、まだ空間を認識する能力が発達途上で、重なりや奥行きを表現することができない子もいる。
そのため、レントゲン描法や展開描法など低学年特有の表現形式がある。
※蛇足　近代絵画はこの描法を積極的に取り入れ、ピカソやマチスは多視点描法、シャガールはレントゲン描法を用いた絵を描いている。
また、古代エジプト絵画には多視点描法が多く見られる。

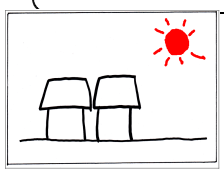


⑦基底線（ベースラインと言う人も）
低学年の絵画表現では「基底線」が存在する。全てはこの線に並ぶ（カタログ式表現）。
この時期は、重なり（奥行き）を表現する能力は、まだ形成されていない。

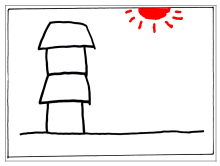
基底線の下は地中、上方は天空（象徴はお日様）。その中間が子どもの表現世界となる。
子どもの発達段階を知って指導しないと失敗する。
（失敗談）１年生の子を指導するとき、犬と遊んだと言うので、基底線の下に犬を強引に描かせ、「犬は息が出来ん」と子どもを悲しませたこと。

固定化された基底線を発展させる参考作品
＊おむすびころりん　基底線を上に上げていく
＊かもとりごんべえ　基底線を下に下げていく

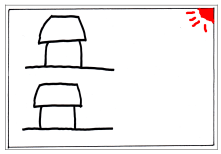
僕の家の向こうに友だちの家がありました



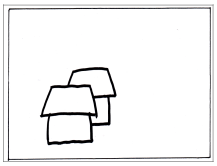
重なりが表現できない段階では
①　友だちの家を横に並べる並列表現が見られる。
子どもの意識としては、向こう側に存在していることになっている。



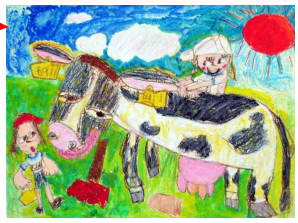
②　並列では向こう側にならないと思う子は縦列表現。
この場合、２階建ての家を表現しているのではないことに注意。



③　基底線を二重にすることで、向こう側を表そうと工夫するようになる。
①や②から空間認識能力がやや発達しつつある段階で見られる表現。



④　子どもの表現に重なりや奥行きが出来てくるにつれて、お日様の位地が変化。
お日様丸ごと状態→半分→４分の１→無くなる
子どもの空間認識の段階（能力）を知って、ワンステップ先に伸ばしていく。
お日様は、子どもの空間処理能力を知る手がかりの１つになる。
ただし、重なり表現が出来ても太陽が残る例外もあり。
画一的に思い込まないこと。例外のない法則はない



※「お日様は、幼稚な表現だから描いちゃ駄目」などと禁止すると、代わりの空間表現を知らない子にとっては不安になる。発達するにつれて描かなくなるので、無理にやめさせる必要はない。

レポート　図画工作の授業中に、Ａ子さんが「先生、Ｂ男くんが私の絵を真似します」と言ってきました。Ｂ男くんを見ると、きまり悪そうにしています。教師としてあなたは、Ａ子さんにどんな言葉をかけますか？　また、Ｂ男くんにどんな言葉をかけますか？

表現力とは伝達力である

自分の思いを伝えるために表現する。
伝わらなければ表現したことにならない。

こう描けばチューリップだと分かってもらえる表現の約束ごと＝概念と称する。
表現力とは、先ず、この概念を獲得すること。

子どもの概念の例

獲得した概念が一つだけなら、表現は貧弱に。
獲得した概念が増すにつれ、表現は多様に。
多様化した表現を組み合わせることで個性が発揮される。
組み合わせる素材がまだないのに、「自分で感じたように表現して」とか「もっと自分なりに工夫して」と、個性的な表現を要求しても無理な注文になる。
では
データベースとなる概念を、どうやって獲得していくのか？

強烈な個性の持ち主のゴッホでさえ、
自分に無い表現が浮世絵にあるのを見て
浮世絵を模写　→　自分の作品に生かす
ゴッホは「模倣」で、表現の幅を広げた

ルーブル美術館の日常的な模写風景
模倣は自己の表現力を高める作業。

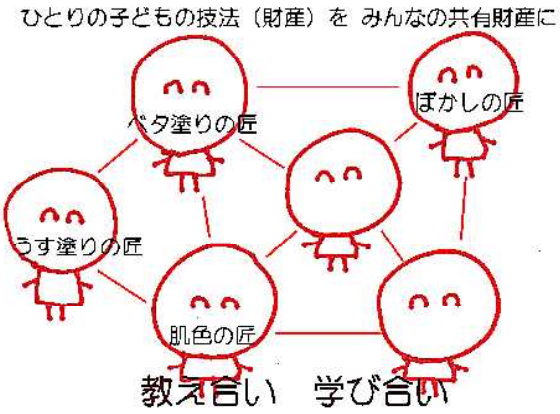
「模倣」は、概念を獲得する手段

個人情報保護の視点からか、「真似する」ことを「パクリ」や「カンニング」と同一視し、拒否感や罪悪感を覚える人もいる。「真似」という言葉は、人真似、猿真似などマイナスイメージがあるのでそのような誤解が生じやすいようである。しかし、教育現場で模倣（真似）は学習の一形態。先生の板書をノートに写すことで計算のやり方を身に付けたり、筆順を覚えたりしている。
模倣がパクリと混同されるのは、真似する人とされる人との関係がオープンになっていないことが原因。　教え合い・学び合いの出来る図工学習について、以下を参照。

Ｂ君はべた塗りが出来る。
でも、べた塗りだけでは「自分の思い」と違う感じが。
※Ｂ君の思いは、まだ十分に表現できていない状態

隣の席のＡさんがうす塗りをしている。
そのうす塗りも合わせて使えば、「自分の思い」に近くなる。
※Ｂ君の思いは、かなり表現できる状態

Ｂ君がたくさんの技法を使えるようになれば、
Ｂ君は「自分の思い」を十分に表現できる。
※Ｂ君の個性が表現される状態。



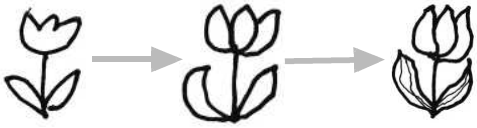
学級の中にいる技法の優れた子どもを
「顔色の作り方の匠」「草の描き方の匠」
「雲の匠」など「ミニ先生」としてみんなに紹介し、
教え合い・学び合いの学習環境をつくる。
※１人の子に負担が集中しないように１人１役とする。

お互いに作品を見せ合って、友だちの良いところを自分の作品に取り入れていく雰囲気を学級の中に醸成すれば、それぞれのデータベースが蓄積され、個性の基盤が創られていく。

経験したこと（データベース）の再構築が、その人の個性である。

概念崩し

模倣によって概念を獲得し、十分に使いこなせる段階で、
「ほんとにそうかな？」と自分の表現を見直させて、
獲得した概念をレベルアップさせる。これを概念崩しという。
概念崩しで、表現はより個性的になる。



＊　この講座で私が最も重要だと思ったのは、先生は子どもと子どもを結びつけるコーディネーターという考え方です。この講座では毎回、現場に生かせるような大変実践的な内容の講義が行われていましたが、中でも、この考え方は私の「先生」という概念に大きな影響を与えました。

小学生のときの図工の授業で、自分が苦労して努力して編み出した技法や構成の仕方を友だちにそっくり真似をされたことがあり、当時はかなりショックでその友だちを一時期軽蔑し話もろくにしなかったことがありました。本講義ではそのような「真似される子」「真似する子」に対するクラス内での先生の働きかけの仕方について考え、「先生が子どもを“師匠”と認め、その“お弟子”をつくっていく」ことで、上手な子と苦手な子との繋がりをつくり、クラスのまとまりを深めていくことの必要性を学びました。

＊　重要なのは、子どもが概念を獲得する方法は模倣であり、そこから個性が生まれてくるということ。理由は、子どもが表現をどのように身に付けていくかを改めて考えることができたから。

自分をふり返ってみても、余り思い出せなかったことなので、勉強になった。その後、学んだ絵の表現方法（版画、切り絵、水彩など）も、私は知っているが子どもたちは知らないことなので、参考作品を見せる大切さが分かった。そこから模倣が始まり、個性へとつながっていくから、とても大事な点だと私は感じた。授業内容の工夫が，生徒に大きく影響するのだと感じた。

＊　この講座で最も重要だと感じたのは、「模倣」です。この授業を聴くまで、模倣はその子のアイデアを盗む悪いことだと思っていました。しかし、教育は「真似」から始まるのです。先生が黒板に書いたやり方を，子どもたちが「真似」しながら習得していくのだから、教育から「真似」を取ったら，教育など成り立たないのです。

うまい友だちの絵を見て「わあー自分もあんなの描きたい！」と思った子どもの意欲を「真似したらダメ！」と潰してしまうのではなく、クラス全体の表現技法の幅が広がる指導の方法がある！。

今までの自分の誤解を改められ、とても納得できたよい機会でした。半年間でしたが、この講座が毎週とても楽しみでした。

＊　最も重要なのは、図工の知識や技術を身に付けさせることより、自分の思いや考えを表現するための方法を学ばせるということである。今まで私が受けてきた図工の授業では，このことがあまり感じられなかった。例えば、人の真似をせずにやることが正しいことであったように感じる。

しかし、この講義において，真似をすることで表現方法を学ぶことができるという考え方を知ることによって、考え方が大きく変わった。

＊　この講義を受けていない以前の私なら、机上で学ぶ他教科と同じように，人の真似は認めず一人で頑張りなさいと言っていたであろう。しかし、国語や算数と図工とは全くの別物で、真似したとしても同じものが描けるわけではない。むしろ真似することで、技法の発達にもつながるのだ。この講義を受けるまでは、このような考え方は全く頭になかったので非常に刺激になった。

＊　自分の個性を出すには、人の真似をしない方がいいと小学校のとき、先生からも言われてきましたし、私もそう思っていました。しかし、この授業で子どもが表現の約束事を手に入れる方法として，模倣という方法があると聞いたときはとても驚きました。

思い返してみると、私は絵が苦手で，自分が表現したいものはあるけれど上手く表現できないという思いに悩まされていました。そこで周りを見て，絵の上手い人のアイデアをちょっと借りて自分の絵をなんとか描いていたように思います。先生というのは，子どもを１年以上の長いスパンで見ることのできる職業です。授業で真似する子どもがいたとしても、その蓄積が表現力を身に付けるものになると知っているならば、長い目で温かく見守ることができます。

模倣って自分を表現するためのひとつの手段だということを知ったので、私が教育実習で、もし図工の授業を担当することになったら、真似するって決して悪いことじゃないんだよと教えてあげたいです。

＊　私が最も重要だと感じたのは「模倣することによって蓄積されたものが個性に変わる」ことであった。

今まで図工の授業を受けた中で，人の作品を真似することはダメなこととしての印象が強く、作品を製作するときは人と違うものをつくらなきゃと考え、自分を追い込んでいた。そのため、自分が教員になったとき、「真似したい」と言われたら「絶対にダメ」と言っていたはずである。

しかしこの授業で学んで，それでは生徒の個性をつくる機会を奪うことになると知ることができた。自分の指導の考え方に大きな影響を与えたこの「模倣」が重要だし大切だと思いました。

＊　私がこの講座で学んだ中で最も重要だと思うのは、子どもの表現のデータベースを増やすことです。
　この講座を受講するまでは、友だちの作品を真似するのはいけないことだと、ずっと思っていました。その結果、私は図工という教科に苦手意識を持ってしまい、自分オリジナルの作品を創りあげなければならないという考えに苦しんできました。しかしこの講座では、真似することが表現のデータベースを増やすことだと教わりました。
　現在でも、私のように苦しんでいる小学生がいると思います。そんな子どもたちに私が教わったことを伝えて、私のような苦手意識を持つ子どもを少しでも少なくなるようにしたいです。自分の思いを自由に表現できる喜びや楽しさを子どもたちに知ってもらうために、データベースを増やすことが最も重要だと感じました。

＊　私が最も重要だと思ったのは、基底線の存在です。小学生の頃から図工が嫌いで，図工はただ絵を描いておけばいいんだくらいの感覚でした。そのため、たしか中学生の頃まで基底線を描いていた気がします。私は「重なり」が分かっていなかったのだと、この授業を受けて気がつきました。
　大学生となった今では、もう絵を描くこともなく、基底線を描くこともないのですが、この講座で最も印象に残ることでしたので、これを重要なことにしました。

＊　この講座で学んだ中で、基底線についての話とその解決策がとても心に残りました。知識としての基底線を知ることで、どのような対策をとればよいのか納得しながら先生の授業を聞くことができました。基底線をなくす対処法も，ただの指示で「基底線を描くな」と言うのではなく、「おむすびころりん」などの話を使って「納得させながら指示を出す」対処法はこれからの自分の授業に役立てていきたいです。